今どきの若者を理解する

小　高　良　友

［1］　はじめに

この論文のテーマは、土井隆義の『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』(筑摩書房､2008)を手がかりにして、勤務校を中心にここ数年間に見聞きしてきた若者の動向を理解することである。

学齢人口が年々減少したため、入学先を選ばなければ今や大学には希望者全員が入学できると言われている。そのためもあり、大学はかつてと比べると学生をとても大事にするようになっている。

私は数年前に学科主任(いわゆる学科長)となり、自分がクラス担任である学生も含め学科全体の学生や教員のトラブルが主任のもとにかなり持ち込まれ、好き嫌いを問わず仕事上それらに対処せざるを得なくなっている。また、それ以外にも、自分の担当授業を含め学内での様々な場面で学生のいろいろな行動を見聞きすることになる。それらの大半は理解可能なつもりでいるが、今までの自分の「常識」では理解しづらいものが間違いなく出てきている。

自分の教育・研究の必要性から土井隆義の若者論にかねてから注目してきたが、2008年に大学院で教材にとりあげた『友だち地獄』は、上記で触れた学生の行動についての理解を深める上で大いに参考になった。土井隆義の考察がすべて正しいとは限らないであろうが、理解に苦しんでいた学生のいろいろな姿に少なくとも一定程度一貫した説明がつけられるようになった。本稿でそれを整理してみたい。

私が体験したことは、学生部長をはじめ厚生委員長・人権委員長が遭遇しているいろいろな問題に比べたら「かわいい」ものであろうが、それでも私にとってはともかくも何らかの対処をせざるを得ない急務であった。とりあえずはそれらに何とか対応してきたが、先の土井の著作に出会ってみると、今後の対処にもさらに参考にできるものがありそうだ。

以下では、まず、土井隆義の『友だち地獄』の骨子を第２節で紹介し、第３節以降では、私が遭遇したトラブルを順次紹介し、それに土井のこの作品を参照してみるとどのような理解が得られるのか、という形で述べていきたい。なお、土井のこの著書からの引用にあたっては引用箇所が多くなるため、その都度註をつけて該当頁を示すことはせず、引用文の最後に該当頁を括弧内に示すにとどめる。

［2］　土井隆義『友だち地獄』の骨子

土井隆義によると、現代の若者は「優しい関係」の世代である。その「優しい関係」の特徴は、おおまかに一応以下の３点にまとめられよう。

ｱ)「他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないことをおそれる今風の『優しさ』の表れ」(8)。

ｲ)「相手の事情を詮索して踏み込んだりしない、あるいは、自分の断定を一方的に押しつけたりしない、そういった距離感を保つ『相手に優しい関係』」(46)。

ｳ) この関係は、「人間関係の息苦しさ」(9)も伴う。

上記ｱ)ｲ)の特徴を持つ関係とは、土井によれば「対立の回避を最優先にする人間関係」(8)でもある。優しい関係にある「クラスメートたちの多くは、たえず場の空気を読みながら、友人たちとのあいだに争点をつくらないように心がけている」(7)。

土井隆義の著書『友だち地獄』のこのタイトルに注目してほしい。このタイトルは、土井が主張しようとしている現代の若者の「優しい関係」の本質を表現しているように思われる。現代の若者が人とむすぶ関係は「優しい関係」なのだが、それは「友だち地獄」でもある関係なのだ。相手に気をつかい、優しい関係を保つことは、若者だけではなく、どの世代の人々でも通常の人間関係で実践しようとしていることであろうが、土井が指摘しているこの関係は、その気づかいが異様なほどで、そのことでかえって友だち関係が息苦しくなってしまう、という関係だ。

この関係は、いろいろな射程をもち、土井によると若者の様々な行動を解いていく鍵になる。この著書のなかで、土井は土井なりにその射程の具体例をあげているのだが、私は、自分が体験したことがらについてこの関係の射程がどのていど及ぶのかを以下で述べてみよう。

［3］ 泣き出す若者

現在勤務する大学で、21年にわたり学生の変化を私は見てきた。統計的に厳密な調査をしたわけではないが、私の部屋にやってくる学生の限りで判断すると、明らかに学生は「泣きやすく」なっている。私と話すなかで、涙をさそうような感動話を私がして、それに対して学生が涙を流すわけではない。

学生が泣き出す一定の情景がある。それは、学生の行動・意見を全面否定するような断定を私がしたときだ。

私は興奮してくると、つい口調がきつくなり、怒って説教するような口調になるため、初めはそのことがいけないのではないかと、話し方を改善をしてみた。現実に何人かの学生から「小高先生は『こわい』」と言われたことがあるからだ。それからは言い方にずいぶんと気をつけ、やわらかい口調で学生たちを傷つけないように配慮をして話してみるようになったのだが、それでも学生たちが泣き出す比率にそれほどの変化は見られなかった。

土井が語る「優しい関係」には、そのような関係を作り出す社会的・教育的背景がある。現在在籍している学生は、個性化教育と呼ばれた新しい教育理念が学校現場に導入された1980年代以降の学生で、自分で考える教育が強調されるようになった世代だ。その分、回答はひとつではなく、いろいろな意見がそれぞれ正しさを持つ、というような教育を彼らは受けてきている。そのような背景を念頭においてみると、私が彼らの意見を真っ向から否定するような対応には学生は慣れていないわけだ。

このような事情を大学院の授業で話したさいにひとりの院生が語ってくれたことによれば、自分も含めて今の学生たちはひとりひとりの考えが尊重されるような教育を受けてきているので、それを真っ向から否定されるような言い方をされたらとても抵抗がある、とのことである。

思えば、私とて自分の意見の背景にある事情なりを尋ねられずに頭ごなしに自分の考えを教師から全面否定されたら頭にくるはずだ。しかし、泣いたりはしないか、とも思ったりする。土井によれば、「学校での自分も自らの本質をストレートに表したものだという思いが強ければ強いほど、もしそこに非難が加えられると、それは自分の全人格が否定されたかのような感覚におちいってしまう。だから、昨今の生徒たちは、教師からの何気ない一言にも大いに傷つきやすくなっているし、逆に反発を感じやすくもなっているのである」(120)。

このような土井の指摘を念頭に置くと、学生たちが「泣き出す」事情が理解できるような気がしたわけである。自分の意見を批判されることに慣れていない世代の場合、各人の意見を尊重し合うことは大切なことであるが、それが高じると、少しでも批判されたときに「全人格否定」の気分になることは十分ありうることだ。

４年生の私の演習(ゼミ)では、各人の研究論文の原稿を少しずつ読み合って意見を出し合っているのだが、全員ではないにしろ、自分の論文について友人や私から何か意見が出されると、自分の全人格を否定されたかのような反応を示す学生がいることに思い当たった。互いに友人関係にある学生が同じゼミを選択する傾向があるのだが、それでもこのような事態が起こりうるのだ。

私が小学校６年のとき、ひじょうに頭が良い転校生がやってきた。彼は、国立大学の附属中学校を受験する「お受験生」であった。ほぼ全員が公立の中学校に進学する「受験とは無縁」の同級生のなかで、彼はただひとり受験勉強に没頭していた。そんな彼は、当時クラスで一番の成績を出していた私には特に厳しい反応をした。ある日、彼から「僕は君が嫌いだ」と言われ、私はそのことがひじょうにショックで、自分の全人格が否定されたように気分になった。そのショックはしばらく消えず、それからも人から自分が評価されることに私はひじょうに敏感になった。

のちに教員の予備軍で非常勤講師で勤務するようになってからの私も、学生から自分に対して厳しい反応をされると、全人格を否定されたように気分になり、そんなことは気にしないほうがよいと他の学生に慰められたりもした。

現在でも、私がかなり自信を持っている授業を厳しく「授業評価」してくる学生がいると、私はひどく落ち込んでいるが、先日、学内の教員向け授業研修会で、全受講生から優秀な評価を受けるような授業はありえない、との話を担当講師から聞いて以来、気分がひじょうに楽になった。

このような傾向がいっそう助長されるような関係が現代の若者の関係にあるとすると、人間関係の気まずさに端を発する社会不安障害や統合失調症を発症する若者が増えてくる可能性がありはしないだろうか。

土井によれば、「優しい関係」にある若者たちは、「思想や信条といった言語的な観念を通さずに、内発的な衝動や生理的な感覚のみに依拠し」ている。そのような「純粋な」若者は、「自分のふるまいと自分自身とのあいだにクッションを有していない。だから、相手とのあいだに生じた軋轢は、たとえそれが些細なものだとしても、あたかも自分という存在が全否定されたかのように受け

取られやすい。純粋な自分であろうとすればするほど、他人との葛藤は自分の本質を脅かしやすいものとなる。そのため、他人との葛藤に対して、かつて以上に敏感な関係を営まなければならなくなっている」(119)。

［4］ 交際範囲の狭さ

この20年間を振り返って変化していることに気づくことのさらなるひとつは、休学する学生が着実に増えているということだ。

もちろん、以前も休学生はいたのだが、その数が少しずつ増えている。原因は様々で、経済的事情が前面に出ているケースがある一方、別の進路に進みたいためにそのことを考える時間がほしいというケースもある。しかし、かなり目立つのが、心の状態にかかわる事情をもつケースだ。それらのケースの大半が、診療内科など専門家の助力を得ている。もっとも、そのような専門家との連携がないケースももちろんある。

この点も、土井の「優しい関係」を念頭におくと、その内実の理解が進むように思われる。土井によれば、「若者たちの日常生活の場は、互いに交通不能におちいった多数の小集団から構成されている。それら小集団のあいだを橋渡しするような大きな関係へと開いていくチャンネルを見いだせないまま、それぞれの小集団が相互の交流をもたずに併存している。だから、いったんある人間関係に入ると、別の人間関係への移動はきわめて難しい」(101)。「『今、このグループでうまくいかないと、自分はもう終わりだ』と思ってしまう。自分が属する集団からの離脱は、そのまま社会生活からの撤退へと直結しやすいのである」(102)。

周囲に気を遣うということは、自然と友人の範囲が狭くなってくる。「優しい関係」にある若者たちは、かつての人たちが周囲に気を遣うという以上に気を遣っているため、それほど多くの人たちとは交際ができなくなる。したがって、友人グループの範囲も狭くなり、自分の友人グループから抜け出そうとする人が出そうになると、異常に反対し、その友人が出てしまってひとりになると、自分は学校に来られなくなってしまう、ということになる。

土井は、国連児童基金の調査データにおいて、日本の若者の孤独感の高さに着目している。土井によれば、「日本の若者の孤独感が強いのは、彼らが特段に人間関係から孤立しているからではなく、むしろ人間関係に対する依存度が高く、それだけ関係のあり方に敏感だからだろう」(121)。これは若者一般の様相である。とすると、休学している学生は、孤独感をいっそうひどく感じていることが予想される。

［5］ リストカットへの驚き

自分の子どもがリストカットをしていたら、さぞや親は驚くであろう。ただし、リストカットの研究で明らかにされていることなのだが、リストカットの大半は「死ぬため」に行われているのではなく「生きるため」に行われている[1]。リストカットという自傷行為は、自分の心の傷を目に見えるようにする行為なのだ[2]。

「臨床社会学」という私の講義のなかで「リストカット」を扱ってください、という要望を８年くらい前に学生から受けた。当時はリストカットに関する研究書も少なく、講義の題材にすることに迷っていたが、思い切ってとりあげるようになった。

それ以来気づくことの一つなのだが、リストカットの体験者、あるいは知人に体験者がいる学生数が着実に増えている。平成20年の受講生では、それらの数は約半数をしめた。これは本学だけの事情ではないはずだ。

今まではリストカットを理解するための社会的背景がよくわかなかったのだが、土井の「優しい関係」に配慮すると一定の理解が可能になる。

土井によれば、「『優しい関係』とは、対立の回避を最優先にする関係だから、互いの葛藤から生まれる違和感や、思惑のずれから生まれる怒りの感情を、関係のなかでストレートに表出することはままならない。むしろそれらを抑圧することこそが、『優しい関係』に課せられた最大の鉄則である。したがって、その違和感や怒りの感情エネルギーは、小刻みに放出されることによる解消の機会を失い、各自の内部に溜め込まれていくことになる」(43)。

「優しい関係」とは、相手に気をつかいすぎるような関係であるから、若者たちは、その分、言いたいこともおさえて波風たたないような関係を保とうとする。当然、ストレスはたまる。それが自分のなかに積もってきて、ひとつのはけ口として、リストカットという形で現れることになるのではないだろうか。

リストカットへの対処の一つとして、当事者が自分の思いを言語化することが役立つと指摘している研究者がいることをロブ＠大月が紹介している[3]。私の講義でもその話をしたところ、聞いていた学生から、自分のそんな重い話を他の人に聞かせたら、かえって相手の負担となり、申し訳ない、という反論が寄せられた。これは言われてみればそうだ。「優しい関係」を配慮している学

生たちにしてみれば、これはいっそうそうであろう。そこで私があらためてお勧めしているのは、自分の思いを日記のような形でパソコンを使って文字にすることだ。しかし、自分の思いを言語化するというこれらの対処法については、土井は納得しそうにない。土井は「リストカットを繰り返す少女たちが、言葉ではなく身体によって自らの生きづらさを表現しようとするのも、おそらく言葉に対してかつてほど信頼を置いていないからだろう」(116)と語っているからだ。この点はリストカットを理解するうえで大事な点となるので、さらに土井の考えを紹介しよう。「言葉によって表現されたものは、それがどれほど強烈な内容だったとしても、別の言葉によって相対化されてしまう危険をつねに孕んでいる。しかし、言葉によって意味づけられる以前から存在する身体感覚は、そうした相対化の危険にさらされることがない。自らの身体感覚によって生きづらさに具体的な形を与え、また身体の傷によってその生きづらさを表現しようと試みるのは、言葉では語りえない絶対的なもののなかにこそ、純粋な真実が宿っていると彼女たちが感じているからだろう」(116)。

このような土井の反論を考慮しても、それでも自分の思いを言語化することがリストカットにたいしては一定の効果があるのではないかとまだ私は思い込んでいる。私はリストカットをした経験はないが、どうしようもない自分のもやもやした思いに苦しんで前に踏み出せないときに、文法も何も度外視して自分の思いをワープロで書き連ね文字化することで吐き出している。そうすると、自分が何に悩んでいるのかがある程度整理され、悩む思いを一定程度相対的・客観的に見ることが可能になり、どうしようもないつらさだと思えたことが、それほどではないのではないか、と思えてきたり、対応策のヒントがおもいついたりして、その悩みから少しは抜け出せることがままあるからだ。もちろん、リストカットをする若者と私の世代とは異なっており、私は「優しい関係」の世代には属していないので、その世代の気持ちを共有しているわけではないことは自覚しているつもりである。

［6］ ことば

前節の最後で紹介した身体感覚を重んじるという若者の傾向は、土井によれば「優しい関係」の世代の大きな特徴の一つとなっている。

学生のことばを聞いていて、自分たちが理解してきた用語の使い方とは違った使い方をしていることに気づくことがある。

大学の恒例行事となっている親睦会に参加したときのことである。行き帰りのバスのなかで、元気のよい新入生が自分のバイト先のレストランの料理の味を評して「やばいですよ」と何度も繰り返していた。私や他の教員たちは、初めは、そのレストランの料理がまずいとか何か商売上の問題があるのかと思って聞いていたが、しばらくすると、「やばい」というのは「称賛」の意味だとわかった。要するに、そのレストランの料理は「すばらしい味」なのだ。その学生は、「やばい」ということばがマイナスの意味を持ったことばであることなど知らないかのようにそのことばを連発していた。

そういえば他にも思い当たることがあった。昨今お笑いブームだが、お笑い芸人たちが歌のうまさを競う「お笑い芸人歌がうまい王座決定戦」という特別番組があるのだが、その審査員となっていた若手の女優が、お笑い芸人の歌声を評して「鳥肌が立ちました」と言っていた。その女優にとって「へたな」歌だったのでもう聞きたくない、というような意味で「鳥肌が立った」のではなく、「すばらしい歌声だった」ので「鳥肌が立った」のだ。つまり、その女優は褒めることばとして「鳥肌が立った」を使っていた。これも従来からある言葉の用法とは違っている。

以上の二つの例について、その場では理解できなかったが、土井の以下に紹介するような説明を知って、なるほどと思った次第である。

「不都合な状態や危険を示す『やばい』という表現や、恐怖の強さや気味の悪さを示す『鳥肌が立つ』といった表現が、今日の若者たちのあいだでは、それとは正反対の称賛や感動を表す言葉としても使われる傾向にある」(117)ことに土井は既に気づいていた。その理由について土井は次のような説明をしている。「『この料理、やばいよね、鳥肌が立ったよ』といった表現が、非難の文脈ばかりでなく、最高のほめ言葉としても成立しうるのは、自分の気持ちが大いに高ぶったという点で、どちらも同じような身体感覚をともなっているからだろう。彼らがそこで表明したいのは、心を大きく動かされた根拠の具体的な中身ではなく、その身体感覚の高まりであり、その強度なのである」(117)。

この他にも、「やさしい関係」の世代が特徴的に使うことばのひとつとして「むかつく」があるのだが、この言葉も体験的によく聞くようになったことばだ。この言葉と「やさしい関係」の世代との関係を土井が考察しており、それはこのことばの背景にある社会的事情の理解に役立つ。

土井によれば、「『むかつく』とは、たとえば『胃がむかつく』と表現するように、そもそも自分自身の生理的な反応をさす言葉であり、必ずしも他人の存在を必要としない。その意味で『むかつく』は、『腹がたつ』とか『頭にくる』などとは違って、『～に対して』という対象を必ずしも前提としない自己完結した言葉である」(44)。

「やさしい関係」は対立の回避を最優先させる関係でもあるから、怒りをぶつける相手がぼかされる「むかつく」という言葉は「やさしい関係」を大事にする若者にとっては便利である。しかし、怒りを向ける対象がぼかされることで怒りの感情がある意味で押さえ込まれるわけであるから、その分ストレスもたまることが予想される。

［7］「小さなトラブル」が「大事件」に変身？

あるクラブで学生同士のもめごとが起こった。彼女たちは「大事件」ですと言って、あたふたと私の部屋に駆け込んできた。さっそくそのふたりの学生に事情を説明してもらった。ところが、内容を聞いてみると、それは私にはたいしたことではないように思え、彼女たちの興奮ぶりとは不釣り合いな内容であった。

土井によれば「人間関係のマネージメントに互いの神経をすり減らし、その関係に少しでも傷がつくと、たちまち大変なパニックにおちいってしまいやすい。その関係の傷は、自らの存在基盤を脅かすような重大事だと感じられる」(119)。

「やさしい関係」を維持していると、ちょっとしたもめごとは大きなトラブルに見えてしまうのかもしれない。

［8］「優しい関係」の若者がソーシャルワークを学ぶ意味－人間関係のスキルを磨く！

私は勤務校でソーシャルワーカーの育成に携わっている。これまで紹介してきたような土井のすぐれた論稿に接しているうち、私は「優しい関係」とソーシャルワークとの関係が気になってきた。土井の言う「やさしい関係」にある若者にとって、ソーシャルワークを学ぶ意味がどこにあるのかを以下で考察してみたい。

「やさしい関係」とは、他人にひどく気を遣っているように見えて、実は「自分」を守るような気の使い方に見える。つまりは、「やさしい関係」にある若者たちは、他人に気を遣っているように見えて、実は自分に気を遣っているのだ。それは、全神経が自己防衛のために注がれているかのようだ。

いろいろな定義はあろうが、ソーシャルワークとは、他の人が生き生きと過ごせるように何らかの支援をしていくという面を持っている。ソーシャルワークとは、いわば、自分の幸せだけではなく他の人も同時に幸せになっていくことを願っていくような仕事とも言える。

ソーシャルワークでは、自分のエネルギーはとりあえず他の人に注がれる。それは、自分にばかりエネルギーが向けられてきた「優しい関係」とは違った関係だ。ソーシャルワークのこのような関係は、「やさしい関係」が持っている「息苦しさ」を克服していくひとつの手段を持っているような気がしてならない。

［註］

1．ロブ＠大月『リストカットシンドローム』 ワニブックス、2000、6 頁。
2．ロブ＠大月、前出、17頁。土井隆義『友だち　地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』 筑摩書房、2008、150頁。
3．ロブ＠大月、前出、120頁。